

## ニジマス秋稚魚の放流効果

吉岡 剛・幡野真隆

### 1. 目的

県内河川漁場では、溪流の漁業権魚種としてアマゴ・イワナ・ニジマスが設定されており、主に秋稚魚放流が実施されている。

これまでアマゴ・イワナについては県内で秋稚魚の放流効果について検討されてきたが、県内 8 漁協において漁業権魚種に指定されているニジマスについては、検討された事例がない。そこで、ニジマスの秋稚魚放流試験を実施した。

### 2. 方法

放流試験は、犬上川上流の堰堤で区切られた調査区間 (217m) で実施した。令和 5 年 10 月 5 日に放流用ニジマスの体長および体重を測定し、脂鱗切除標識を施した。また、体重は目標増殖量の基準である 20g 程度となるように選別を行い、放流密度が 0.07 個体/m<sup>2</sup>となるように放流数を調整した。

令和 5 年 10 月 6 日に平均体重 21.5g のニジマス 108 尾を調査区間の中央付近に放流した。放流翌春の令和 6 年 4 月 15 日に採捕調査を行い、標識の確認、体長と体重の測定を行い、2パス除去法により個体数を推定するとともに生残率を求めた。

### 3. 結果

ニジマス秋稚魚の翌春までの生残率は 14.8%であった。過年度の放流試験では、アマゴ秋稚魚 (15g 程度) の翌春までの生残率は 0.8~4.6%、イワナ秋稚魚 (15g 程度) の翌春までの生残率は 5.0~15.0%であり、ニジマスは溪流魚 3 魚種の中でも高い生残率を示した。

採捕魚の平均体重は 38.0g と放流時の倍近くまで成長していた (図 1)。

ニジマスは産業管理型外来種に指定されて

おり適切に管理するよう定められている。

近年、猛暑により河川水温の上昇が懸念されているが、ニジマスは釣られやすく、イワナやアマゴに比べて高水温に強い特徴がある。漁場を有効に利用するには、水温をモニタリングし、各魚種を適地に放流する必要がある。

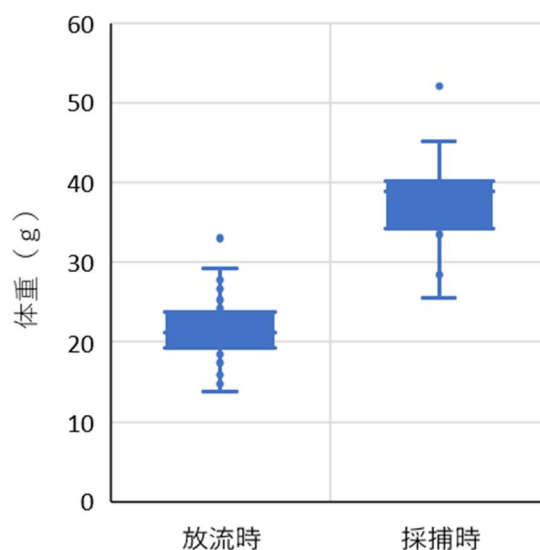


図 1 放流時と採捕時の体重